

# 大尼御前御返事

弘安三年九月二〇日 五九歳

獄<sup>獄</sup>卒<sup>卒</sup>問<sup>問</sup>魔<sup>魔</sup>たけ<sup>たけ</sup>丈<sup>丈</sup>朱<sup>朱</sup>  
ごくそつえんま王の長は十丁ばかり、面はすをさし、眼は日月のごとく、齒はまんぐわ<sup>馬 嶽</sup>  
の子のやうに、くぶ<sup>拳</sup>しは大石のごとく、大地は舟を海にうかべたるやうにうごき、声は  
雷<sup>雷</sup>のごとくはたはたとなりわたらむには、よも南無妙法蓮華經とはをほせ候はじ。日<sup>仰</sup>  
蓮が弟子にてはをはず。よくよく内をしたゝめて、をほせをかほり候はん。なづきを<sup>頭 腦</sup>  
わり、み<sup>身 責</sup>をせめていのりてみ候はん。たゞ<sup>只 先</sup>さきのいのりとをほしめせ。これより後はの  
ちの事をよくよく御かため候へ。恐々謹言。

九月廿日

日 蓮 花 押

大尼御前御返事